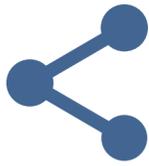


脳性麻痺の機能的アウトカムを改善するための介入 子どもと家族に自信を持ってもらうために CPの子どもや若者に関わる臨床家のためのガイドライン

脳性麻痺の子どもや若者と関わる時、臨床家は家族とつながり、個々のニーズや希望を考慮し、家族に自分の子どもをサポートするスキルと知識があると実感し、自信を持ってもらうことが重要である。



つながりをもつ



子どもや家族と協力関係を築くことが、効果的な介入を行う上で重要になる。家族は子どものことを誰よりもよく知っており、子どものケアの専門家としてみなすべきである。

家族の話に耳を傾け、個々の家族のニーズや希望を理解し、強力で協力的な関係を構築することにより、家族が臨床的に推奨されていることを実行する可能性を高め、ひいては子どもにとってより良い結果をもたらすことにつながる。

知識とエビデンスを共有する

臨床家は、子どもや家族に対して、最新のエビデンスや介入の選択肢を積極的に提供し、どの介入が子どもや家族に最も適しているか、家族が十分な情報を得た上で決定できるようにすべきである。子どもの年齢、能力、診断に基づいて、その子どもに適さないと研究で示唆されている介入は、効果がないことが示されている介入と同様に、推奨されるべきではない。



年少児の家族は、脳性麻痺児の発達や予後の経過についての情報があれば安心である。このような情報は、子どもの可能性に焦点を当てた肯定的な言葉で伝えるべきである。

家族によっては、情報が多すぎて圧倒されることもある。個々の子どもや家族の状況に応じて、提供する情報の量を調節しながら進めていく。



自己練習を奨励する

家族に知識、方策、継続的なサポートが提供されれば、家庭での練習が目標達成に最も効果的な方法であることが示されている。臨床家は、家族が必要なサービスや器具を利用できるように支援するなど、セラピーの場以外でも、家族が自信を持って目標とする行為を練習できるように努めるべきである。

臨床家は、コーチング・アプローチを用いることで、必ずしも臨床家に頼らなくても、子どもや家族が新たな課題に立ち向かい、新たな目標に挑戦できるという自信を持ってもらうことができる。

個人のニーズと希望に合わせる

介入は、子どもの目標とする行為を直接練習することに焦点を当てるべきである。いつ、どのように練習を行うかについての計画は、その計画が実行可能であり、子どもと家族が納得できるものであることを確認するために、子どもと家族と共同で立てるべきである。どの程度の練習が必要かは、子どもや目標の複雑さによって異なる。

介入は、子どもにとって楽しく、やる気を起こさせるものでなければならず、子どもが上達していくのに十分なやりがいのあるものでなければならない。痛みや苦痛を伴う介入は変更し、別の介入を検討すべきである。



翻訳者 堀本佳音、杉本路斗、登根太一